様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４４１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０１０７４

研究課題名（和文）古墳時代中期・畿内外縁地域における埴輪生産組織の内部構造および変遷過程の研究

研究課題名（英文）Study of the internal structure and the changing process of Haniwa production system around Kinai District in the Middle Kohun Period

研究代表者
犬木　努（Inuki, Tsutomu）

大阪大谷大学・文学部・教授

研究者番号：４０２７０４１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：古墳時代中期・畿内外縁地域の事例として、久津川古墳群（京都府城陽市）を対象とし、所蔵機関である城陽市教育委員会の協力を得ながら、出土埴輪の悉皆的な調査研究（全体撮影、細部撮影、観察、計測、実測）を行った。各円筒埴輪の実測作業には本科研費で雇用したアルバイトが従事した。研究代表者が実測指導を行い、逐一、実物と照合しながら全実測図の点検作業を行った。本科研費の事業期間内に、車塚古墳出土円筒埴輪（51個体）、梶塚古墳出土円筒埴輪（125個体）、山道東古墳出土円筒埴輪（98個体）の実測を完了した。また関連調査として、金毘羅山古墳（同宇治市）および芝山遺跡（同城陽市）出土埴輪等の蛍光X線分析を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、畿内外縁地域に所在する久津川古墳群から出土した円筒・形象埴輪のほぼ全てについて、悉皆的な調査研究を実施し、その埴輪生産組織および変遷過程の概要を明らかにした点にある。
　今回の調査対象である久津川古墳群出土埴輪については、それぞれ正式な発掘調査報告書が刊行されているが、報告書刊行時点での研究成果しか反映されていないし、各自治体の博物館・資料館などでの展示スペースも限定されており、本資料群のような質量ともに充実した埴輪資料が今日的な学問水準において活用し切れていない状況であるが、そのような未活用の埴輪資料の再検討を実施し、その価値を再提示した点に、本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：As the typical case of Haniwa around Kinai District in the Middle Kohun Period,I studied almost all of Haniwa excavated from Kutsukawa Kohun group(Joyo City,Kyoto Prefecture). Under the cooperation of the board of education in Joyo City,I carried out complete research on Haniwa concerned. Photographing,description,measurement and drawing have been all carried out thoroughly in these five years. The research material are 51 pieces of cylindrical Haniwa from Kurumazuka Tumulus,125 pieces of cylindrical Haniwa from Kajizuka Tumulus and 98 pieces of cylindrical Haniwa from Yamamichi-Higashi Tumulus. Moreover the X-ray fluorescence analysis of Haniwa excavated from Konpirayama Tumulus(Uji City,Kyoto Prefecture) and Shibayama Tmuli(Joyo City, Kyoto Prefecture) are carried out.

研究分野：日本考古学

キーワード：古墳時代　古墳　埴輪　手工業　工人　同工品

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

昨今の埴輪研究では、一古墳に供給・樹立された埴輪の総体を分析し、その生産に従事した埴輪工人の人数や、各埴輪工人が製作した埴輪の差異を総合的に分析する研究手法（「埴輪同工品分析」）が盛んに行われている。近年、筆者が推進している分析事例では、一古墳における埴輪生産組織だけではなく、一地域における複数古墳に樹立された埴輪の比較検討作業を通じて、同一地域で活動した埴輪工人集団の内部構造や通時的変遷にまで迫ることに成功し、大きな成果を上げている（千葉県域における「下総型埴輪」の研究や、宮崎県西都原古墳群における「女狭穂塚類型」埴輪および「男狭穂塚類型」埴輪の研究が挙げられる）。

しかしながら、古墳時代の政治・経済・文化の中枢である畿内地域では、この種の研究はほとんど行われていない。その背景としては、畿内埴輪研究における主たる問題関心が編年論に向けられていたこともさることながら、王陵級の巨大古墳の多くが、「陵墓」として宮内庁の管理下に置かれていることも大きく影響していると思われる。そのような中で、京都府城陽市に所在する久津川古墳群は、上記のような埴輪生産組織の全容を分析する上で、非常に良好な条件を備えている。

久津川古墳群出土の円筒埴輪・形象埴輪は多数にのぼるが、城陽市教育委員会（および青塚古墳については京都府教育委員会）の全面的な協力を得て、各古墳出土の円筒埴輪・形象埴輪の個体数・破片数、あるいは各埴輪の所蔵状況などについて、既に詳細な状況を確認・把握している。また、各古墳における調査年次や各トレンチ出土埴輪の個体番号の再確認など、既往の調査経過についても基本情報の整理を既に終えている。

久津川古墳群出土埴輪については、その大半を所蔵・保管する城陽市教育委員会の全面的な協力のもと、現段階で既に相当量の作業に着手しており、これまでに終了している作業も多々ある。久津川古墳群における原位置出土の円筒埴輪は約 430 個体であるが、作業量全体の３～４割程度の作業が既に終了している。本研究期間を通じて、残りの作業を完了させる予定である。

２．研究の目的

本研究では、古墳時代中期・畿内外縁地域における埴輪生産組織の実態を解明し得る事例として、京都府城陽市に所在する久津川古墳群出土埴輪を分析する。

同古墳群では、城陽市教育委員会や京都府教育委員会によって、車塚古墳（前方後円墳、全長約 180m）や、芭蕉塚古墳（前方後円墳、全長約 115m）、丸塚古墳（帆立貝形古墳、全長約 80m）、山道東古墳（造出付円墳、直径約 57m）、梶塚古墳（方墳、一辺約 50m）、青塚古墳（方墳、一辺約 35m）等の発掘調査が行われ、総計 430 個体もの円筒埴輪が原位置で検出されているほか、形象埴輪片も多数出土している。畿内全域でも同一古墳群でこれだけ多数の円筒埴輪が原位置で検出されている古墳群は他にはない。各古墳の墳形・規模も多様で、車塚古墳を頂点とする複雑な階層構造を明瞭に示している。

本研究では、久津川古墳群出土埴輪の形態・技法・ハケメ工具・胎土等を総合的に検討し、当該古墳群の埴輪生産に従事した埴輪生産組織の内部構造およびその変遷過程の全容を解明することを目的とする。

３．研究の方法

久津川古墳群において原位置で出土した全ての円筒埴輪について、古墳毎に、順次、実測図作成および調査研究を進めていく。またそれと並行して、各古墳出土の形象埴輪片についても、古墳毎に、順次、調査研究を進めていく。いずれも、城陽市教育委員会の全面的な協力のもと、城陽市教育委員会の文化財整理室において各種作業を実施する。

円筒埴輪に関する具体的な調査内容としては、各埴輪の全体写真撮影、細部写真撮影、観察、計測、実測図作成を行う。各円筒埴輪の実測作業には、本科研費で雇用したアルバイト作業員が従事する。研究代表者が実測指導を行い、逐一、実物埴輪と照合しながら、今回作成した実測図全ての点検・修正作業を行う。

調査対象となる円筒埴輪を古墳毎に列挙すると、車塚古墳出土円筒埴輪（合計 51 個体）、梶塚古墳出土円筒埴輪（合計 125 個体）、山道東古墳出土円筒埴輪（合計 98 個体）となり、合計 274 個体となる。

また、形象埴輪の多くについては、既に実測図が作成されていることから、原則として実測作業は実施せず、各埴輪の全体写真撮影、細部写真撮影、観察、計測のみ行う。

なお、上記の久津川古墳群出土埴輪の分析作業と並行して、隣接地域の古墳出土埴輪について蛍光Ｘ線分析を行う。胎土分析の対象は、梅の子塚１号墳・２号墳出土埴輪（京都府城陽市所在）、同芝山古墳群出土埴輪（同前）、金比羅山古墳出土埴輪（同宇治市所在）である。

４．研究成果

（１）久津川古墳群出土埴輪の調査研究について

①車塚古墳出土埴輪について

円筒埴輪については、原位置で検出された 51 個体全てについて、全体写真撮影、細部写真撮影、観察、計測、実測作業を終了させることができた。また、形象埴輪片についても、全体写真撮影、細部写真撮影、観察、計測作業を全て終了させることができた。

なお、現在も継続している車塚古墳の史跡整備を目的とした発掘調査で出土した円筒埴輪・形象埴輪については、城陽市教育委員会による整理作業が進行中で、発掘調査報告書も未刊行であることを鑑み、本研究の調査対象とはしていない。

②梶塚古墳出土埴輪について

円筒埴輪については、原位置で検出された 125 個体全てについて、全体写真撮影、細部写真撮影、観察、計測、実測作業を終了させることができた。また、形象埴輪片についても、全体写真撮影、細部写真撮影、観察、計測、実測作業を全て終了させることができた。

③山道東古墳出土埴輪について

円筒埴輪については、原位置で検出された 98 個体全てについて、全体写真撮影、細部写真撮影、観察、計測、実測作業を終了させることができた。また、形象埴輪片についても、全体写真撮影、細部写真撮影、観察、計測作業を全て終了させることができた。

（２）関連する埴輪についての蛍光Ｘ線分析について

久津川古墳群出土埴輪については、古墳毎に蛍光Ｘ線分析を本研究以前にほぼ終了させているので、本研究では、これまでに蛍光Ｘ線分析を実施していない近隣古墳を対象として、出土埴輪の蛍光Ｘ線分析を実施した。具体的には、梅の子塚１号墳（京都府城陽市所在）出土埴輪、同２号墳（同前）出土埴輪、芝山古墳群（同前）出土埴輪、金比羅山古墳出土埴輪（同宇治市所在）の蛍光Ｘ線分析を行っている。これまでに蛍光Ｘ線分析を実施している久津川古墳群出土埴輪の多くは古墳時代中期の埴輪であったが、今回、補足的に分析した各古墳出土埴輪はいずれも古墳時代前期の埴輪であり、非常に興味深い分析結果を得ることができた。

（３）若干のまとめと今後の展望

本研究を通じて、久津川古墳群における主要古墳ともいえる、車塚古墳・梶塚古墳・山道東古墳出土埴輪に関する基礎情報（実測図を含む）を完備することができた。本研究以前に基礎作業（実測図を含む）が終了している、芭蕉塚古墳・青塚古墳についての基礎情報を加味することにより、久津川古墳群における主要古墳出土埴輪の「同工品分析」および、同古墳群において継続的に「活動」した埴輪工人集団の内部構造や通時的変遷の分析に必要な基礎データがほぼ完備されたことになる。ここにおいて、本研究の所期の目的については、ほぼ十全に達成することができたと見做すことが可能である。

ただし、久津川古墳群には、上記の主要古墳以外にも、複数の中小古墳が所在している。具体的には、山道古墳、丸塚古墳、芝ヶ原古墳群、上大谷９号墳など（いずれも京都府城陽市所在）である。これら中小古墳の埴輪分析を経た上で、久津川古墳群における埴輪工人集団の内部構造や通時的変遷の全体像についてさらに詳細に論じることが可能になると考えている。これについては、今後の研究課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 三辻利一・犬木 努	４．巻 なし
２．論文標題 芝山遺跡出土埴輪の蛍光Ｘ線分析	５．発行年 2023年
３．雑誌名 京都府遺跡調査報告集 第189冊 新名神高速道路整備事業関係遺跡 芝山遺跡・芝山古墳群	６．最初と最後の頁 337-345
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 犬木 努	４．巻 なし
２．論文標題 「領域」が対峙する場所―「下総型」埴輪と異系統埴輪の共存／対置―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 古墳文化基礎論集	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 犬木 努	４．巻 第３号
２．論文標題 大木台２号墳 形象埴輪配置の再検討―〈構造軸〉による形象埴輪配置の二大別―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 印西市立印旛歴史民俗資料館研究紀要	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 犬木 努	４．巻 －
２．論文標題 埴輪からみた沖出古墳	５．発行年 2020年
３．雑誌名 徹底解剖！沖出古墳とその被葬者像	６．最初と最後の頁 8-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 犬木 努	4．巻 —
2．論文標題 近い陪塚／遠い陪塚／見えない陪塚	5．発行年 2019年
3．雑誌名 古墳と国家形成期の諸問題	6．最初と最後の頁 180-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 犬木 努	4．巻 —
2．論文標題 岩橋千塚古墳群の形象埴輪配置―〈構造〉と〈論理〉への接近―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 磨斧作針―橋本博文先生退職記念論集―	6．最初と最後の頁 221-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 犬木 努	4．巻 第26号
2．論文標題 宇治市金比羅山古墳出土の円筒棺について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 山城郷土資料館報	6．最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 三辻利一・犬木 努	4．巻 第19号
2．論文標題 淡輪古墳群出土埴輪の蛍光Ｘ線分析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 志学台考古	6．最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

１．著者名 三辻利一・犬木 努	４．巻 －
２．論文標題 番川下流遺跡出土埴輪および関連資料の蛍光Ｘ線分析	５．発行年 2019年
３．雑誌名 番川下流遺跡―町道海岸連絡線道路整備事業に伴う発掘調査―	６．最初と最後の頁 54-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関